

# 第4章 リミタリアニズムのための自律性に基づく理由

著者: Danielle Zwarthoed

## 1. 序論: 「アフルエンザ(affluenza)」事件

2013年6月15日、テキサス州の十代の若者Ethan Couchは、ウォルマート店舗からビール2ケースを盗み、父親のピックアップトラックを運転し、制限速度が時速64キロの田舎道を時速110キロで走行し、道路から外れ、3台の車に衝突し、4人を死亡させた。検査により、彼の血中アルコール濃度は法定制限の3倍であることが判明した。彼は大麻とバリウムも摂取していた。検察は20年の懲役刑を求めた。

Couchの弁護士は、依頼人が\*\*アフルエンザ(affluenza)\*\*を持っていると主張した:非常に裕福な家族で育てられ、決して限界を設定されなかったため、彼は自己の行為に対して完全に責任を負うことができなかった。心理学者は、Couchが責任ある代理人ではないと証言した。裁判官はこの議論を受け入れ、Couchには刑務所ではなくリハビリテーションが必要だと決定した。彼は10年間の保護観察期間を付与した。

この決定は多くの批判を引き起こした。批評家たちは、富は判決決定において考慮されるべきではなく、そのような決定は富裕層を法の上に置くと指摘した(Eckenroth 2015)。

批評家たちが、同じ犯罪を犯人が富裕か貧困かによって異なる方法で処罰する二重基準を適用する刑事司法制度について心配するのは正しい。しかし、アフルエンザ弁護には一粒の真実があるかもしれない。

### 本章の目的

本論文は、アフルエンザが精神障害であるとも、有効な法的弁護であるとも主張しない。これらの主張を擁護することは哲学者の専門領域を超えている。本論文の目的は、アフルエンザ弁護が自由主義的政治哲学者に分配的正義について何かを教えるかもしれないかどうかを検討することである。

より正確には、もし極端な富が個人的責任の能力を損なうならば(少なくとも法的な意味でなくとも、個人的または道徳的な意味で)、私たちは富の高いレベルと個人的自律性の間の負の相関を仮定するかもしれない。個人的自律性(広く解釈される)は、ほとんどの自由主義理論が正しい利益の分配を通じて確保し促進することを目指す目標である。したがって、これらの理論が極端な富を警戒すべきかどうかを検討する価値がある。

本論文は、この思考の線を拡大し、リミタリアニズムのための自律性に基づく議論を発展させようと試みる。

### 既存のリミタリアニズム議論との違い

Ingrid Robeynsは、リミタリアニズムを支持する二つの道具体的議論を提供している:

1. 民主主義的平等の議論: リミタリアニズムは民主的平等の達成に道具体的である
2. 緊急ニーズの議論: リミタリアニズムは貧困層の緊急ニーズを満たすことに道具体的である

Robeynsの議論は、\*\*他者配慮型(other-regarding)\*\*正当化として分類できる。本論文は異なる議論戦略を追求する。それは、人が持ちすぎることが他者が民主的権力と物質的富の公正な分け前を受け取ることを妨げるかどうかという問いに取り組まない。

本論文が焦点を当てる問いは、人が持ちすぎることが、まさにその人が特定の財にアクセスすることを妨げるかどうかである。したがって、これは\*\*自己配慮型(self-regarding)\*\*リミタリアニズムの正当化である。

過度の富が幸福(well-being)に及ぼす否定的影響についての豊富な実証文献があるが、本論文が焦点を当てる財は幸福ではない。本論文が焦点を当てるのは自律性(autonomy)である。

多元主義社会においてさえ、自由民主主義は自律性を促進する使命を持つ。なぜなら、それは適切な民主的参加、ならびに幸福と善き生の概念を反省し、修正し、または離脱する個人的能力を確保するからである。

## 本章の二つの主張

本論文は、以下の二つのテーゼを支持する議論を提唱し議論する：

(1) 特定の富の上限以上では、人がより多くの物質的資源を持つことが、常に彼女の自律性を増加させるわけではない

(2) そのような富の上限以上では、物質的所有は、富裕な人々の自律性、あるいは少なくとも一部の富裕な人々の自律性の発展と行使に対して有害でさえあるかもしれない

## 本章の三つの目的

1. 実証的推測の妥当性: 過度の富が自律性に及ぼす有害な影響に関する実証的推測の妥当性を支持する。心理学と社会学における異なる実証研究の系統を集めて再解釈する。
2. 規範的含意: もしこれらの推測が真であるならば、自律性に基づく政治哲学の規範的含意を引き出す。可能な含意は、特定の富の上限を超える100%の富税と所得税を通じたリミタリアン的物質的資源の分配の実装であろう。
3. 認識的バランスの回復: 多くの自由主義志向の学者と政策立案者が、貧困層を対象とした家父長主義的措置(現物給付など)が正当であることを認めることを望んでおり、それによって彼らが完全に自律的ではないと仮定していることを考慮すると、本論文は、貧困層の自律性に対する私たちのしばしば批判的な評価と、富裕層の自律性の欠如に対する私たちの無関心の間の認識的バランスを回復することを目指す。

---

## 2. 自律性の多次元的説明

### 自律性の定義

本論文において、自律性は、個人的能力と、この能力の発展と行使を許可し促進する条件の集合の両方を指す。これらの条件は、自律性の二つの一般的次元にグループ化できる: 内的条件と外的条件。

### 内的条件

内的条件は自己統治的代理の条件を指し、少なくとも三つの条件のサブセットを含む：

#### (1) 手段的能力

代理人は、目標を達成するための適切な手段を選択し、行動を計画し、これらの計画を達成するためには必要な精神的能力、才能、技能を十分な程度備えている必要がある。これらには、とりわけ以下が含まれる：

- 情報を見つける能力
- 主張の真実または確率を確認する能力

- ・ 戰略を設計する能力
- ・ 意志の弱さと先延ばしを克服するために必要な技能

## (2) 真正性(authenticity)条件

これらの能力は必ずしも自律的に選択された目標に役立つわけではないため、別の条件のサブセットが必要である:**真正性条件**。

真正性は以下を含む:

- ・ 自己の一次的目標を批判的に反省する能力
- ・ それらが自己の反省的に構成された高次のコミットメントと自己概念と一致するようにそれらを修正する能力
- ・ これらのコミットメントと自己概念も修正する能力

フェミニスト批判は、代理人が抑圧的な社会化と規範に従属している場合、真正性条件を満たす可能性が低いことを指摘してきた。

## (3) 自己認識条件

第三の条件のサブセットは、代理人が**自己のコミットメントを定義し、それに従って行動する能力**があり、**権限を与えられていると自己を見なすことを可能にすること**を目指す。

これらの条件には以下が含まれる:

- ・ **自己信頼(self-trust)**
- ・ **自己尊重(self-respect)**
- ・ 他者によって自律的代理人として認識され、扱われること

## 外的条件

ほとんどの人にとって、自己統治的代理の行使と発展には好ましい外的条件が必要である。

### (1) 独立条件

他者による干渉——操作、教化、圧力、不当な強制——は緩和され、可能であれば排除されるべきである。

### (2) 基本的自由

適切なレベルの基本的政治的・社会的自由を確保する。これらの自由には以下が含まれる:

- ・ 良心の自由
- ・ 表現の自由
- ・ 結社の自由
- ・ 移動の自由
- ・ 政治的参加の自由

### (3) 選択肢の適切な集合

自律性の行使が意味を持つためには、代理人は選択する適切な選択肢の集合を持たなければならない (Raz 1986, 372-375)。

適切な選択肢の集合は:

- 代理人が重要な選択とより些細な選択を行うことを可能にするのに十分に多様な範囲の選択肢を含まなければならない
- 代理人が悲劇的ジレンマに直面するようなものであってはならない
- これらの選択肢へのアクセスは真正でなければならない(代理人は十分にそれにさらされ、それらを真剣に考慮できるべきである)

## 関係的自律性

本論文で提供される自律性の説明は、二つの意味で関係的説明である:

1. **社会的要因の分析:** 自律性を妨げるまたは助ける要因の分析は、社会的関係、構造、規範を考慮に入れる
  2. **能力の社会的構成:** 自律性の能力は、社会的関係を通じて部分的に構成され、社会的文脈において行使される
- 

## 3. 過度の富が自律性を損なう仮説

本セクションは、過度の富が自律性を損なうかもしれない様々な経路を検討する。これらは実証的仮説であり、哲学的議論ではなく、心理学と社会学の実証研究に基づいている。

### 3.1 認知能力への影響

#### 仮説1: 富は意思決定の質を低下させる

実証的証拠:

- 心理学研究は、富裕層が貧困層よりも悪い意思決定をする傾向があることを示唆している
- 富裕層は、リスクを過小評価し、過度に楽観的であり、批判的フィードバックを無視する傾向がある
- 「hubris syndrome(傲慢症候群)」: 権力と富が長期間続くと、現実検証能力が低下する(Owen & Davidson 2009)

メカニズム:

- **批判的フィードバックの欠如:** 富裕層は、他者が彼らに同意し、批判を控える傾向があるため、誤った決定を修正する機会が少ない
- **学習機会の減少:** 富裕層は失敗の結果を経験しにくいため、経験から学ぶ機会が少ない

#### 仮説2: 富は自己制御を損なう

実証的証拠:

- 研究は、富裕な子供が衝動制御の問題を持つ可能性が高いことを示唆している
- アフルエンザ現象: 限界なく育てられた富裕な子供は、自己制御能力を発展させる機会が少ない

## メカニズム:

- 即座の満足: 富裕層は望むものをすぐに得ることができるため、遅延満足を学ぶ機会が少ない
- 限界の欠如: 親が限界を設定しない場合、子供は自己制御能力を発展させない

## 3.2 真正性への影響

### 仮説3:富は批判的反省を妨げる

#### 実証的証拠:

- 富裕層は、自己の価値観と目標を批判的に反省する機会が少ない可能性がある
- 「bubble effect(バブル効果)」: 富裕層は、自己と類似した人々とのみ交流し、多様な視点にさらされない

#### メカニズム:

- 同質的社会的ネットワーク: 富裕層は、自己と同じ階級、価値観、世界観を持つ人々とのみ交流する傾向がある
- 代替的生き方への曝露の欠如: 富裕層は、異なる生き方を経験または観察する機会が少ない

### 仮説4:富は適応的選好を促進する

#### 実証的証拠:

- 富裕層の子供は、両親の価値観と目標を批判的に反省せずに内面化する可能性がある
- 社会的地位の維持への圧力が、真正な目標の追求を妨げる

#### メカニズム:

- 社会的期待: 富裕層は、特定の職業、ライフスタイル、価値観を採用するという社会的圧力に直面する
- 代替案の考慮の欠如: これらの期待があまりに強力である場合、代替的生き方を真剣に考慮する機会がない

## 3.3 自己尊重への影響

### 仮説5:富は自己尊重を損なう可能性がある

#### 実証的証拠:

- 一部の研究は、富裕層が低い自己評価と不安を経験する可能性があることを示唆している
- 「imposter syndrome(詐欺師症候群)」: 富裕層は、自己の成功が運やコネによるものであり、自己の能力によるものではないと感じる可能性がある

#### メカニズム:

- 功績の不確実性: 富裕層は、自己の成功が自己の努力と才能によるものなのか、それとも継承された富と社会的コネによるものなのかを判断することが困難である
- 他者からの真正な尊重の欠如: 富裕層は、他者が自己を富のためにではなく、自己自身のために尊重しているかどうかを判断することが困難である

### 3.4 選択肢の集合への影響

#### 仮説6: 富は選択肢の過剰をもたらす

##### 実証的証拠:

- 「choice overload(選択過剰)」の研究は、あまりに多くの選択肢が意思決定を麻痺させ、満足度を低下させることを示している
- 富裕層は、あまりに多くの選択肢に直面し、それが決定を困難にし、選択への満足度を低下させる

##### メカニズム:

- 決定疲労:** あまりに多くの選択を行うことは、認知資源を枯渇させる
- 機会費用の増加:** より多くの選択肢があるほど、選ばれなかった選択肢がより良かったかもしれないという懸念が大きくなる

#### 仮説7: 富は意味のある選択肢への曝露を制限する

##### 実証的証拠:

- 富裕層の子供は、狭い範囲の職業とライフスタイルにのみさらされる可能性がある
- 社会的隔離が、代替的生き方への曝露を制限する

##### メカニズム:

- 社会経済的隔離:** 富裕層は、地理的および社会的に他の階級から隔離されて生活する
- 文化的同質性:** この隔離は、多様な文化、価値観、生き方への曝露の欠如をもたらす

---

## 4. リミタリアン的分配と自律性の保護

### 4.1 自律性の促進としてのリミタリアニズム

もし上記の仮説が真であるならば、**特定の富の上限を超えることは、富裕層自身の自律性を損なう。**したがって、リミタリアニズムは、**富裕層の自律性を保護する手段**として正当化できる。

これは逆説的に聞こえるかもしれない: 富を制限することが、富裕層の利益になる? しかし、自律性の多次元的説明を考慮すると、これは理にかなっている:

#### より多くの富 ≠ より多くの自律性

特定の閾値を超えると、追加的富は:

- 認知能力を損なう
- 批判的反省を妨げる
- 自己尊重を低下させる
- 意味のある選択肢を制限する

### 4.2 富の上限はどこに設定されるべきか?

問い合わせ: リミタリアン的閾値はどこに引かれるべきか?

**答え:** 実証的問い合わせである。閾値は、それ以上では追加的富が自律性を増加させなくなる、あるいは自律性を損ない始める点に設定されるべきである。

#### 考慮すべき要因:

1. **基本的ニーズの充足:** 閾値は、すべての基本的ニーズと多くの非基本的ニーズを充足するのに十分高くなければならない
2. **社会的文脈:** 閾値は、社会的・経済的文脈に依存する(生活費、社会規範など)
3. **個人差:** 一部の人々は他の人々よりも高い閾値を必要とするかもしれない(障害、慢性疾患など)

**暫定的推定:** Robeyns(2017)は、先進国において閾値は年間約200,000-300,000ドル(世帯調整後)かもしれないと示唆している。

#### 4.3 すべての富裕層に適用されるか?

重要な問い合わせ: これらの仮説はすべての富裕層に当てはまるか?

**答え:** おそらくそうではない。一部の富裕層は:

- 強い自己認識と批判的反省能力を持つ
- 多様な社会的ネットワークを維持する
- 謙虚さと自己制御を実践する

しかし、**政策は集団レベルで設計される**。もし過度の富が多くの富裕層の自律性を損なう傾向があるならば、リミタリアン的政策は正当化される。

**類比:** 私たちは、最低賃金法を正当化するために、すべての雇用主が労働者を搾取すると仮定する必要はない。多くの雇用主が搾取する傾向があることで十分である。

---

## 5. 家父長主義と強制の問題

### 5.1 リミタリアニズムは家父長主義的か?

**異議:** 「リミタリアニズムは不当な家父長主義である。富裕層が自己の自律性を損なうことを選択する自由を持つべきではないか?」

応答:

#### (1) ソフト家父長主義

リミタリアニズムは、**ソフト家父長主義**として正当化できる:

- 個人が自律的でない決定をすることを防ぐ
- 例:中毒性薬物の禁止、安全ベルト法

もし過度の富が自律性を損なうならば、それは中毒性物質に類似している:

- 初期段階では魅力的に見える
- しかし長期的には代理能力を損なう

#### (2) 予防的介入

リミタリアニズムは、人々が最初から過度に富裕になることを防ぐ:

- すでに富裕な人から富を取り上げるのではない
- むしろ、誰も自律性を損なうレベルの富を蓄積しないことを確保する

これは、伝統的家父長主義よりも侵襲的でない。

### (3) 非家父長主義的正当化

重要なことに、リミタリアニズムは家父長主義に依拠せずに正当化できる:

- 他者配慮型理由(Robeynsの民主主義的議論と緊急ニーズ議論)
- 自己配慮型非家父長主義的理由(例:富裕層の幸福の促進)

自律性に基づく議論は、リミタリアニズムのための追加的正当化を提供するが、唯一の正当化である必要はない。

## 5.2 認識的バランスの問題

**重要な観察:** 私たちの社会は、貧困層の自律性を疑うことには寛大だが、富裕層の自律性を疑うことには消極的である。

例:

- 貧困層:** 現金給付ではなく現物給付を提供(彼らが「間違った」ものに金銭を使うことを懸念)
- 富裕層:** 無制限の富の蓄積を許可(彼らが自律的に決定していると仮定)

### この非対称性は正当化されるか?

おそらくそうではない。もし私たちが以下を認めるならば:

- 貧困が自律性を損なう
- 過度の富も自律性を損なう

ならば、私たちは**両方の極端**において家父長主義的介入を考慮すべきである、あるいはどちらにおいても考慮すべきでない。

リミタリアニズムは認識的バランスを回復する:

- 貧困と富裕の両方が自律性に対する脅威であることを認識する
- 分配曲線の両端における介入の必要性を認める

## 6. インセンティブの問題

### 6.1 異議

**異議:** 「リミタリアニズムは経済的インセンティブを破壊する。人々は、追加的富を保持できないならば、働き、革新し、リスクを取る動機を失うだろう」

### 6.2 応答

#### (1) 実証的疑問

追加的富が本当に必要なインセンティブかは不明である:

- 多くの人々は、金銭以外の理由で働く(創造性、社会貢献、認識)
- 超高所得は、必要というよりも慣習の問題かもしれない

## (2) 閾値の設定

リミタリアン的閾値は非常に高く設定される:

- ほとんどの人々は決してそれに達しない
- したがって、ほとんどの人々のインセンティブは影響を受けない

## (3) 代替的インセンティブ

社会は、非金銭的インセンティブを発展させることができる:

- 名誉、賞、認識
- 社会的地位(富以外の基準に基づく)
- 内発的動機の培養

## (4) 効率性のトレードオフ

もし富の上限がある程度の非効率性をもたらすとしても、それは自律性の価値によって正当化されるかもしれない:

- 私たちは、他の価値(自由、平等)のために効率性を犠牲にすることをすでに受け入れている
- 自律性は、同様の考慮に値する

---

## 7. 結論

### 主要な主張のまとめ

本章は、以下を論じた:

1. **自律性の多次元性:** 自律性は、内的条件(認知能力、真正性、自己尊重)と外的条件(独立、自由、選択肢)を含む
2. **富の逆説:** 特定の閾値を超えると、追加的富は自律性を増加させず、むしろそれを損なう可能性がある
3. **損傷のメカニズム:** 過度の富は、以下を通じて自律性を損なう:
  - 認知能力の低下(批判的フィードバックの欠如、自己制御の問題)
  - 真正性の妨害(バブル効果、適応的選好)
  - 自己尊重の低下(功績の不確実性、真正な尊重の欠如)
  - 選択肢の問題(選択過剰、意味のある選択肢への曝露の制限)
4. **リミタリアニズムの正当化:** リミタリアニズムは、富裕層自身の自律性を保護する手段として正当化できる
5. **家父長主義の問題:** この正当化はある程度家父長主義的だが、以下の理由で許容可能である:
  - ソフト家父長主義の形態
  - 予防的介入(取り上げるのではなく、蓄積を防ぐ)
  - 他の非家父長主義的正当化と組み合わせることができる

## 6. 認識的バランス: リミタリアニズムは、貧困と富裕の両方が自律性を脅かすという認識において認識的バランスを回復する

### 今後の研究

本章の議論は、さらなる実証研究を必要とする仮説に基づいている。今後の研究は以下を調査すべきである:

1. 実証的検証: 過度の富が自律性を損なうという仮説の体系的検証
2. 閾値の特定: リミタリアン的閾値がどこに設定されるべきかの実証的決定
3. 個人差: どのような個人的・社会的要因が、富と自律性の関係を調整するか
4. 文化的文脈: 異なる文化において、富と自律性の関係は異なるか

### あなたのSoE研究への決定的含意

Zwarthoedの自律性論証は、あなたのSoE理論の哲学的双子です:

#### 1. 構造的並行性

Zwarthoed (経済的自律性)	山内 (福祉的自律性)
脅威: 過度の富	脅威: 過度の支援権力
損傷: 富裕層の自律性	損傷: 利用者の自律性
メカニズム: 批判的フィードバックの欠如	メカニズム: 対等な関係の欠如
解決策: 富の上限(リミタリアニズム)	解決策: 権力の上限(Constitutional AI)
正当化: 自己配慮型	正当化: 利用者配慮型

#### 2. Zwarthoedの議論の直接的適用

過度の支援権力が利用者の自律性を損なう経路:

##### (1) 認知能力への影響

- 富裕層: 批判的フィードバックの欠如 → 意思決定の質低下
- 利用者: 支援者への依存 → **自己決定能力の発展阻害**

##### (2) 真正性への影響

- 富裕層: バブル効果 → 批判的反省の欠如
- 利用者: 支援者の価値観の押し付け → **真正な目標の抑圧**

##### (3) 自己尊重への影響

- 富裕層: 功績の不確実性 → 自己評価の低下
- 利用者: 能力評価の内面化 → **自己肯定感の低下 (NOCC 10-20パーセンタイル)**

##### (4) 選択肢への影響

- 富裕層: 選択過剰 → 決定麻痺
- 利用者: 選択肢の制限 → **意味のある人生設計の困難**

### 3. 「認識的バランス」の革新性

#### Zwarthoedの中心的洞察:

私たちは貧困層の自律性を疑うことには寛大だが、富裕層の自律性を疑うことには消極的である。この非対称性は正当化されない。

#### あなたのSoEへの適用:

福祉システムは利用者の自己決定能力を疑うことには寛大だが、支援者の権力行使の妥当性を疑うことには消極的である。この非対称性は正当化されない。

#### 両者の共通主張:

- 分配曲線の両端(貧困と富裕、依存と支配)が自律性を脅かす
- 認識的バランスの回復が必要

### 4. 家父長主義の問題への応答

あなたが直面する批判: 「Constitutional AIは家父長主義的ではないか? 利用者と支援者の関係に介入する権利があるのか?」

#### Zwarthoedの応答を適用:

##### (1) ソフト家父長主義

- 支援者の過剰な権力は、利用者の自律的決定を妨げる
- Constitutional AIは、非自律的状況を防ぐ

##### (2) 予防的介入

- すでに形成された権力関係を破壊するのではない
- むしろ、最初から過剰な権力の蓄積を防ぐ

##### (3) 非家父長主義的正当化の併存

- 自律性論証は追加的正当化
- 権利保護、データ主権などの非家父長主義的理由と組み合わせる

### 5. 理論的統合

あなたの研究は、Zwarthoedの議論を**福祉領域に体系的に拡張**:

Zwarthoed: 富の過剰 → 富裕層の自律性損傷 → リミタリアニズム

山内: 権力の過剰 → 利用者の自律性損傷 → Constitutional AI

これは、単なる類推ではなく、同じ規範的構造(自律性の保護)を共有する理論的貢献である。